「乳と蜜がしたたる地」

「乳と蜜がしたたる地」とは現実にはそのような地はないので、比喩によって「その地が非常に豊か」「甘く魅惑的な地である」ことを、詩的に表現したのでしょう。この「したたる」とされる「乳と蜜」とは「乳香と没薬」のような気が私はしていました。少なくとも大いに関連はあるでしょう。

本文に見たとおり、当時の宝物の代表は黄金、そして乳香と没薬です。当時は同じ重さの黄金に乳香と没薬は等価交換されたのです。

イエメンと接し紅海に面するアシール地方は、乳香と没薬の原料となるは灌木が自生します。黄金は「したたる」わけではないのですが、乳香と没薬の原料の樹液樹脂は「したたる」のです。特に「乳」は乳香の語源が乳なので「乳がしたたる」は「乳香がしたたる」と解釈するのは十分成立するでしょう。

ただし「蜜」を「没薬」とするのは少し難があるかもしれませんから、つぎのように全体として解釈できるかもしれません。

「乳香と没薬の原液がしたたり、契約の民は豊かに潤う。この地は甘く蜜がしたたるがごとき魅惑の地となる。」

乳香と没薬が名産となるアシール地方が「約束の地」であり、パレスチナでは「約束の地」ではありえないのです。